

子どもの良いモデルになっていない親の交通行動 2

—保護者に対する質問紙調査—

筑波大学医学医療系 水野 智美
筑波大学医学医療系 徳田 克己

I. はじめに

親の交通行動が子どもの良いモデルになっているかどうかを解明するために、親の交通行動が子どもの良いモデルになっているかどうかを解明するために、実際の交通場面において親子の行動を定点観察する調査（水野・徳田，2020）、保護者に対する質問紙調査（本研究）、幼児に対するヒアリング調査の3つの研究を実施している。

水野・徳田（2020）は、幼児を連れた保護者が子どもと一緒に横断歩道上を信号無視して渡るケース、歩行者用信号が点滅した後に子どもと一緒に横断を始めた（以下、点滅信号後の横断）ケース、子どもと一緒に歩きながらスマートフォンをしているケースがどの程度あるのかを計測した。その結果、幼児を連れた家族の中には信号無視をしたり、歩行者用信号が点滅した後に横断をし始めたりするケースが少なくないことを確認した。特に、子どもが赤信号で横断歩道を渡ろうとしたところを保護者が注意するケースがある一方で、保護者が子どもを先導して信号無視をしていたケースも少なからずあったという。また、子どもと一緒に歩きながら、保護者がながらスマホをしているケース、保護者と一緒に子どもがポケモンGOをしながら歩いているケースを確認している。水野・徳田（2020）は、信号無視をする、歩行者用信号が点滅した後に横断する、ながらスマホをするケースは、それぞれ1割程度であり、多いとは言えないが、交通ルールやマナーを守っていない姿を子どもに見せているケースは子どもが交通事故に遭う危険性を高め、ルールやマナ

ーを守る「良き交通社会人」を育てる教育を阻害する行為であると述べている。

そこで本研究では、幼児を持つ保護者に大規模に調査をし、子どもと一緒にいる時および子どもがいない時にどのような交通行動をしているのかについての認識を明らかにするとともに、定点観察による調査（水野・徳田，2020）と同程度に保護者が不適切な交通行動をしているのかについて確認したい。

II. 方法

1. 調査対象者

東京都内、北海道内、茨城県内、千葉県内、沖縄県内の幼稚園、保育所、認定こども園に子どもを通わせている保護者1150名を対象とし、794名（回収率は69%）から回答を得た。そのうち、回答に不備がある人を除き、766名の回答を分析対象とした。回答者の属性を表1に示した。

2. 調査手続き

東京都内、北海道内、茨城県内、千葉県内、沖縄県内の11の幼稚園、保育所、認定こども園の管理者に調査を依頼し、承諾を得た施設の保護者に質問紙を配布し、留置法によって回収した。なお、無記名、自記式の質問紙を用いた。調査時期は2018年7～8月であった。

3. 倫理的配慮

本研究は、筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：1318）。

表 1. 回答者の属性	N=766	
	%	人数
子どもから見た属性		
母親	95%	727 名
父親	5%	39 名
年齢		
20 代	9%	69 名
30 代	63%	485 名
40 代	27%	209 名
50 代	1%	3 名
子どもの人数		
1 名	21%	164 名
2 名	60%	458 名
3 名	16%	122 名
4 名以上	2%	21 名
無回答	1%	1 名

Ⅲ. 結果と考察

幼児期の子どもと一緒に場合の交通行動および親がひとりで行動している場合の交通行動を「非常によくする (5 点)」から「全くしない (1 点)」までの 5 段階のリッカート尺度で尋ねた (表 2、表 3)。また、子どもと一緒に場合と親の単独行動の場合の交通行動の比較を表 4 に示した。

表 2 によると、子どもと一緒に場合には、「横断歩道を渡る時に子どもに手を挙げさせる」「横断歩道を渡る時に自分が手を挙げる」行動は、それぞれ平均値が 3.52 ($SD=1.37$)、1.93 ($SD=1.22$) と他の行動に比べて行われていない傾向がみられた。このことから、子どもに手を挙げて横断歩道を渡るように保護者はあまり促しておらず、かつ自分自身も子どもにその行動を見せることをしていないと言える。しかし、その他の交通行動については、保護者自身の認識では、概ね適切な交通行動をしており、子どもにも同様にさせようとしている傾向あることが確認できた。つまり、子どもと一緒にいる場合には、保護者は子どもに適切な交通行動を行うように促し、自分自身もそのような行動をモデルとして示そうとしているのである。

ただし、表 3 と表 4 をみると、「自動車の助手席に乗る時にシートベルトを着用する」こと以外は、親単独の場合には、不適切な行動をする頻度が有意に高くなることを確認した (例えば、「信号がある横断歩道を渡る時に自分が左右の確認をする」については、子どもと一緒に場合には平均値が 4.67 であるにもかかわらず、親単独の場合には 4.17 に数値が下がる)。つまり、「自動車の助手席に乗る時にシートベルトを着用する」ことは、道路交通法第 71 条 3 に示され、違反した場合には罰則が設けられていることから、子どもがいてもいなくても、習慣としてその行動が身についているのであろう。しかし、その他の交通行動については、子どもと一緒に場合であれば、「我が子を事故に合わせたくない」という思いや「子どもの前では適切な行動をしなくてはならない」という規範意識が働き、我が子の前だけでは適切な行動をとろうとするが、我が子がいなければ、その思いや規範意識が薄れるということである。

なお、子どもと一緒に場合においても、保護者が自分一人である場合においても、「信号のない横断歩道を渡る時に左右の確認をする」「信号のある横断歩道を渡る時に左右の確認をする」と言う行動についての平均値が 5.0 にならないのは、周囲の動きだけを見て、自身では確認せずに横断歩道を渡ることがある人がいるためであろう。

自分が赤信号を渡る姿を子どもに見られた経験の有無を尋ねたところ、35% (271 名) があると答えた。子どもに見られた経験のある人を対象に、子どもがまねをして赤信号で渡ろうとした経験の有無を「非常によくある」から「全くない」までの 4 件法で尋ねた (表 5)。その結果、「非常によくある」「時々ある」と答えた人を併せると 16% となり、割合としては多くはないが、子どもが不適切な行動を模倣している家庭があることが確認できた。

また、子どもにエスカレータを歩く姿を見られた経験の有無を尋ねたところ、52% (399 名) があると答えた。子どもに見られた経験のある人を対象に、子どもがまねをしてエスカレータを歩こ

表 2. 幼児期の子どもと一緒に場合の行動

	<i>M</i>	<i>SD</i>
信号のない横断歩道を渡る時に自分が左右の確認をする	4.90	0.39
自動車の助手席に乗る時にシートベルトを着用する	4.90	0.48
信号がある横断歩道を渡る時に自分が左右の確認をする	4.67	0.68
横断歩道前で子どもに道路に飛び出さないように言う	4.65	0.71
横断歩道を渡る時には、子どもと手をつなぐ	4.63	0.68
自動車に乗る時には、6歳未満の子どもをチャイルドシートに座らせる	4.61	0.86
信号のない横断歩道を渡る時に子どもに左右の確認をさせる	4.46	0.90
道を歩く時には、子どもと手をつなぐ	4.28	0.83
子どもが自転車に乗る時にはヘルメットを着用させる	4.27	1.23
信号がある横断歩道を渡る時に子どもに左右の確認をさせる	4.18	1.01
自動車の後部座席に乗る時にシートベルトを着用する	3.83	1.35
横断歩道を渡る時に子どもに手を挙げさせる	3.52	1.37
横断歩道を渡る時に自分が手を挙げる	1.93	1.22
渡り始める前に歩行者用信号が点滅していても、渡ってしまう	1.85	0.95
横断歩道が近くにあるにもかかわらず、横断歩道ではないところを横断してしまう	1.79	0.92
道を歩いている歩きのスマホをしてしまう	1.59	0.88
車が来ていなければ、赤信号で横断歩道を渡ってしまう	1.22	0.58
横断歩道を渡っている時に歩きのスマホをしてしまう	1.17	0.55
歩行者用信号が青に変わる前に渡り始めてしまう	1.14	0.50

表 3. 親が単独の場合の行動

	<i>M</i>	<i>SD</i>
自動車の助手席に乗る時にシートベルトを着用する	4.92	0.41
信号のない横断歩道を渡る時に左右の確認をする	4.78	0.64
信号がある横断歩道を渡る時に左右の確認をする	4.17	1.18
自動車の後部座席に乗る時にシートベルトを着用する	3.22	1.56
渡り始める前に歩行者用信号が点滅していても、渡ってしまう	2.95	1.30
横断歩道が近くにあるにもかかわらず、横断歩道ではないところを横断してしまう	2.68	1.30
道を歩いている歩きのスマホをしてしまう	2.06	1.16
車が来ていなければ、赤信号で横断歩道を渡ってしまう	1.83	1.15
歩行者用信号が青に変わる前に渡り始めてしまう	1.45	0.88
横断歩道を渡っている時に歩きのスマホをしてしまう	1.43	0.84
横断歩道を渡る時に手を挙げる	1.23	0.72

表 4. 子どもと一緒にいる場合と親の単独の場合の行動の比較

	子ども と一緒に	親の 単独	t 値 (df)
自動車の助手席に乗る時にシートベルトを着用する	4.90	4.92	1.14 (753)
信号のない横断歩道を渡る時に自分が左右の確認をする	4.90	4.78	5.15** (758)
信号がある横断歩道を渡る時に自分が左右の確認をする	4.67	4.17	13.05** (761)
自動車の後部座席に乗る時にシートベルトを着用する	3.83	3.22	13.68** (755)
横断歩道を渡る時に自分が手を挙げる	1.93	1.23	17.51** (759)
渡り始める前に歩行者用信号が点滅していても、渡ってしまう	1.85	2.95	24.50** (758)
横断歩道が近くにあるにもかかわらず、横断歩道ではない ところを横断してしまう	1.79	2.68	21.97** (758)
道を歩いている歩きスマホをしてしまう	1.59	2.06	13.84** (754)
車が来ていなければ、赤信号で横断歩道を渡ってしまう	1.22	1.83	15.95** (755)
横断歩道を渡っている時に歩きスマホをしてしまう	1.17	1.43	9.15** (759)
歩行者用信号が青に変わる前に渡り始めてしまう	1.14	1.45	9.97** (734)

表 5. 親が信号無視をする姿を子どもが見て、
子どもがまねをしようとした経験 (n=271)

非常によくある	3%	7名
時々ある	13%	36名
あまりない	67%	180名
全くない	7%	20名
無回答	10%	28名

うとした経験の有無を「非常によくある」から「全くない」までの4件法で尋ねた(表6)。その結果、「非常によくある」「時々ある」と答えた人を併せると46%となり、約半数を占めた。赤信号で渡

表 6. 親がエスカレータを歩く姿を子どもが
見て、子どもがまねをしようとした経験
(n=399)

非常によくある	6%	23名
時々ある	40%	160名
あまりない	47%	187名
全くない	1%	2名
無回答	6%	27名

ってはいけないことは幼稚園や保育所等でも教えられているため、保護者が赤信号で渡っている姿を見ても、多くの子どもはいけないことであると認識できるが、エスカレータを歩いているのはいけな

いことについては幼稚園や保育所等で教えられる機会がないため、保護者が歩いていれば、子どもも当然、自分もしてよいことであると考えてであろう。

IV. まとめ

本調査から、保護者は子どもと一緒にいる時には子どもに適切な行動を促し、自分も適切な行動をとって、子どもに模範を示そうとしているが、子どもと一緒にではない時には、不適切な行動をする頻度が増えることが確認できた。ただし、水野・徳田(2020)が子ども連れの交通行動を観察したところ、子どもの前でも赤信号で横断したり、歩きスマホをしたりしていることを確認しており、必ずしも保護者の認識と実際の行動が同じではないことが推測できる。

水野・徳田(2002)は、大学生を対象に、保護者の手本にならない行動を見て、子どもの頃にどのように感じていたのかを尋ねたところ、「大人はずるい」「大人になれば守らなくてもいい」などと感じている割合が高いことを明らかにしている。子どもの頃に保護者から交通ルールやマナーを守るように言われているが、保護者が守っていないならば「大人は守らなくてもいい」と認識し、大人になることへのあこがれや大人への反発から大人の見えていないところで不適切な行動が出現することも考えられる。保護者がモデルにならない交通行動をとっていることを改善していかなければ、その子どもが大人になった時にも不適切な交通行動が繰り返されることになると言わざるを得ない。

文献

星忠通(1993)家庭における交通安全教育, *IATSS Review*, 19 (1), 17-23.

稲垣具志・小早川悟・寺内義典・青山絵里(2016)子どもの道路横断判断に関する情報提供によ

る保護者の意識への影響分析, *土木学論文集 D3(土木計画学)*, 72 (5), 1985-992.

北折充隆・吉田俊和(2004)歩行者の信号無視行動に関する観察的検討—急ぎ要因となれ要因の影響について—, *社会心理学研究*, 19, 234-240.

松井玲子(2018)子どもの生活とルール—幼児期の交通安全教育を事例として—, *京都聖母女学院短期大学研究紀要*, 47, 13-26.

Mizuno T., Edano H. & Tokuda K. (2015) Parents' Behavior that Cannot Be Role Models for Children: Comparison between university students' perspective in 2014 and 2000, *The Asian Society of Child Care*, 6, 23-32.

水野智美・徳田克己(2002)親や教師は子どもの「手本」になり得ているのか—大学生を対象にした回想調査の結果を中心に—, *経営福祉学研究*, 7, 29-42.

水野智美・徳田克己(2020)子どもの良いモデルになっていない親の交通行動1—交通場面における定点観察調査—, *実践人間学*, 11, 1-8.

西館有沙・水野智美・徳田克己(2016)歩きスマホ防止意識を高める啓発映像の内容とその効果—視聴覚教材としての可能性を探る—, *教材学研究*, 27, 109-116.

佐藤祐也・大杉尚之(2017)記述的規範と人数が歩行者の信号無視に及ぼす影響, *山形大学大学院社会文化システム研究科紀要*, 14, 55-64.

徳田克己・水野智美・西館有沙(2019)駅構内のエスカレータを駆け上がる人の実態解明と交通困難者の感じている不安, *Kenyusha Annual review*, 21, 13-15.

付記

本研究は、公益財団法人 タカタ財団における平成30年度研究助成を受けて行ったことを記す。

Parents' behaviors in traffic that are not good role models for the children 2 —Questionnaire for parents—

The purpose of this survey was to clarify the traffic behavior of parents when walking with or without toddlers, and whether the toddlers ever exhibited improper traffic behavior.

This questionnaire was conducted with 1,150 parents of toddlers, and we obtained responses from 794 parents.

From the survey results, we could conclude that parents encourage their children to take appropriate actions and show an appropriate example when they are with their children. However, we concluded that they take inappropriate action more frequently when they are not with their children.